

PS-063-5 手掌多汗症に対する胸腔鏡下胸部交感神経節切除術の切除範囲の検討

¹自治医科大学外科学講座呼吸器外科学部門, ²宇都宮社会保険病院

手塚 康裕¹, 佐藤 幸夫¹, 長谷川 剛¹, 山本 真一¹, 大谷 真一¹,
金井 義彦², 手塚 憲志², 遠藤 哲哉¹, 蘇原 泰則¹

【目的】手掌多汗症に対する胸腔鏡下胸部交感神経節切除術は有効な治療の一つであり, かつその治療効果も高い. しかし術後に代償性発汗が出現する頻度も比較的多く, 手掌の発汗が減少しても代償性発汗のために患者の満足度が低くなる症例も存在する. 近年, 交感神経節の切除範囲によりその効果や代償性発汗の発現頻度が異なるという報告が散見されており, 実際に術式の違いによりどの程度治療効果や代償性発汗の発現頻度, および患者の満足度に違いがあるのかを検討した. 【方法】1999年4月から2006年9月までに当院で手掌多汗症に対し胸腔鏡下胸部交感神経節切除術を施行した13症例を対象とし, 第2, 第3交感神経節を完全に切除した10症例と, 第3, 第4, 第5肋骨の直上で交感神経節を焼灼した3症例で, 手術効果, 代償性発汗の発現頻度およびその程度, 患者の満足度を比較した. 【結果】いずれの症例も手掌の発汗は減少し再発を来した症例は認めなかった. 第2, 第3交感神経節を切除した症例では代償性発汗の発現頻度が高く, 患者の術後満足度が低い傾向があるのに対し, 第3, 第4, 第5肋骨の直上で交感神経節を焼灼した症例では, 日常生活に支障となるような代償性発汗の発現を認めず, 患者の術後満足度も高い結果となった. 【結論】胸腔鏡下胸部交感神経節切除術後の代償性発汗の出現に何らかの形で第2交感神経節が関与し, 顔面多汗症の治療目的を除いた多汗症の治療において第2交感神経節の切除は必須でない可能性が示唆された.